日本一統志

九十九之百

四十八

862
160

類
號
冊 48

ガラス使用

日本一統志巻第九十九

目録

真田昌幸深志ニ謀テ伊豆守笛吹詐ヲ九發事

附真田左衛門佐伊賀者ヲ殺ヲ以テ逃出ヲ昌幸止ル事

并秀忠公安房守ト軍之請康立事

關東方備配筒井先陣ニ定ル事

附筒井家士名張ヲ奪村討レ并筒井敗走之事

并關東方安房守ニ謀欺引返ス事

帝國圖書館藏

福原梅三郎氏記念圖書

福原蔵書

福原達夫氏寄贈本

特3-1

帝國圖書館藏

日本一統志巻第九十九

真田昌幸深志ニ謀テ伊豆守ヲ留守ニ詐リ取[illegible]事

附真田左衛門佐伊賀[illegible]被ヲ関[illegible]出スヲ昌幸止事

并秀忠公安房守方ト軍之前使立事

去程ニ根津甚平方ヘ伊豆之守方より使来て嫡子の先陣しる事を伝へ何も返書を持きて及返爰ニて甚平ハ當表詐リて所戦の物己み甚平を申付して斉ハ安房守昌幸ハ一封の封書を渡し詐リ

ガラス使用

の御に万事を方常に跋渉練磨と云野伏の軍
に親代く信上の境まて数万の大軍を追返し
日本国まて山国北伏の軍上にては上方にては丹
波国河内国摂華東ふおゐは信州に上州ゟと折紙
付しる其中まて摂津は代く北伏の大将之番紙は
不及ト知、仏一盃ニ獨ニ皆をて悩早竟の勝利ニ
はおし不構只敵方ニ屓死人討ホ斗とて仏ね
肝心諸を出陣の軍配は真田ヶ胸三寸の算ニ任り
先去方一敵陣より将伊豆ち先登まて出ても不知
信州ニ前立在城しる伊豆るなれは後陣より配
有名なる越る時の防戦は三方斟酌の上退出んは
必定なり依て我一戦の書を其若ニ臨んや推ん
まつし謙ニ及さ虫と後の後を氣配ニ紀不是也
昌幸まて推て見しる一計書ニ
関東の獨ニ皆陣を試んとせは我の敵ニ不及
や、未落討退退をし不て安く易息信幸か
旅先をなは玉茶を相止メ三皆をふ通升
ふ討て追り味方は石ぢ敗石ぢ討の事肝要
早竟の穂宗は子東西へ立別れしる仏中の
軍配は仏言難述三構之此境まは次北宗我は

知る者なし不立文字なんと侍れど
と書しかハ根津甚平も早速呑込難しといへとも
不知合大概を察し伊豆守方の返事とし後
縁無しく書面へ向ひ父子東西へ分れしる意味
なんと云葉を総述不立文字まて筆にも書れぬ境を
まハ心を以て心を伝るとハ此へしり先年武田の
滅亡後信長より十万石を以て誘引しに家の子
郎等の異見しけるを安房守承引せず当家の真
田ハ海北の二男父一徳斎婿で真田を名乗り弾正
忠といひ村上義清に謀て居城を失ひ上州へ浪人
し再旧国の本意を遂んと武田勝頼の名かまへ只一
人の浪人あるハ所々に離散しける事もなき真田
に於信州日向に天下貫の武田法性院信玄の先
陣を以て勝忠頼が入馬とも陣中より相生再ひ
信州の地へ帰るさへ示し信玄諏馬を被出や幾久
盛捨しうりし上田の在城帰参の本望子々孫々迄
知れしる事乾坤立ん其内ハ武田より承恩と不
可作と思ッ云ッ心腑に銘し安房守か百万石をくれるとて
ても主君の二字を対に並て出仕せんハ人面獣心
只今家康を不意中ゟ掛に日本国中に味方なき人

ガラス使用

なきとても真田の家名を末代まで一城の主とし
弓矢を忘れぬ武士の本意を立通さばやと其家臣は猶
に不遠上杉小栗徳川の三大将より泄之有て程く
計知しとなれ何方ても不仕主康宗思ひ出せん
故し東西へ分り別れ居たり之候しことも扨此
関と摂津表にて覚悟し居るは其の者共に歎か
中来る諸浪人の方より出しける使文を不遠
戦ふ如く真田流皆弓を並べ備へなすと山力持経
まりて進みし出る伊豆守を隣寺は下りて立て御者
危き者ともかきまいらせ是の端乎は徳磨の野

伏見の京方将人の働き伊豆守の三百余人を退下
見へしかは信幸采配振りて来徐なる若武者防
く敵は先年より頭を下と山肌の西まで勇みとて
何程の事かと伊豆守は信幸此先達を仕損して
再沼田へ下り給ひ御奥ヶ前男の中書の下黒肉
府公の思召敵陣の大将父昌幸の前と云只今
許の真中ヶ伊豆守るヶ墓所あれは討死して堀を
築くは信上本国の沼深の古戦場宿る所に続き
堀さイテ其実割して生死の境を見えしよとて出陣
来る采配を腰に挿しく横様出死の覚悟と見

諸しけれは真田家臣の士長谷川小山田矢沢兄弟を先として是を見んと信幸の前に立て進み登れは流石狩馴し沼津か手の者野伏の一揆一方より跡をさりに跡をさして引かる伊豆守信幸大音上け敵は足元浮立てうたかの山へ手先をされて出るに兄大熊親子は見へさるか跡に先キ兄と云聲いまた絶さるにたりの山の猟の叢の中よりも大熊将是同立死者の若三十人斗すき頭もち足も血に染ていくすりよりきん大熊は父子諸取りし実やへ大音に罵りけるは汝の敵をは猪

先キ貴つに実なる山中の獣同然打き外ちや無るへし猪猿喰や肉叢や取へきそ太刀未物のみなきらん打きしと息をも不継追かる所へ浅本陸より御使として小関ける本多豊後守来や出来るく先達先を留しか我の兵取れ中へ渡さぬ所なれとも婦子の前を思ふや斗伊豆守へ甘人高名させ後日上は後刻中さんトレ忠政も桐伏乃兵は親父に性の程と父中書譲りの力量立て続の名人西面より実立く並こし三百人の猪津か皆心猪人歸り難なく実立これ諸の上を見追上三

百人皆〻ならおと見へしか諸隊の兵伏拾人ずゝ百人
斗許筑の一隊猿矢は省みと此人数中より鉄炮多
く打へしか其迅早く打出んとしけるか不思議
時ならぬ雷轟〻と鳴ルよと見へしか忽車軸を流ス
大雨に鉄炮の火縄も打消へ其百人既雷雨に恐しう
木進みかね飛下りて旗津をさへすてし人絶命敵し
味方も雷雨に依て本陣へ行れとも軍も止めは雨も
止ミとも早く〻と互の軍を打掛しか敵方は一人もな
く悉く討れ真田伊豆守一手の者も打死もなく
手負少々人斗りなり然るに皆の雑兵なる雷吹晴れ

誧しける勇者皆感しける此度の雷鳴なかりせは矢
継早又迅早き其百人の弓鉄炮ニは伊豆守の三千
人打死手負多少出来許を計り難し六ヶ敷か
るへきに雷雨は猶伊皆消果しかは此時若狭
か是なりん安房守の人を留しける本来畢竟真田の
家名を永く関東方に残〻を知て偏に伊豆守
を守護の雷雨なるへしと敵味方の真田家の軍
感し合て在命の者よりして鳴神若狭と名を
改りしも名誉は死後を飾しけりと云しとかや
斯て旗津甚平は旗を引れ在京の陣将つれは不立寄

只一騎一戦を揚て真田安房守か居城の上田へ引退
かんと云甲斐押破られ難く皆上方へ打て通らん事叶
明日の内なるへしと告来るを左衛門佐幸村は打かへ
馬場へ出て責馬の指南を家来共に数へ居ける処に
穴山小助と云左衛門佐幸村か近侍の詰合合口の若
者なるか来りてや是は責馬は打止て浜口の味方
防戦を仕損し関東勢信濃内へ繁合由知らせ来る
と等しく幸村怒れる面色にて、汝ら伊賀
浜者はいかにかくと云所へ根津甚平も来りて浜口
破走の上は先推量てそ伊賀浜破走して此様

討死しと云数と云ふ馬上にて突立左衛門佐か力足
鞍坐立行足鐙行足踏ゝ張りしか馬は立足四蹄を
ちゝめ外しけり幸村怒れる顔を打出し辛くと
打笑ひ味方の負軍を心ちもやみぬへき足め戦
場へ可討乗ぬ退散はれと持たる策を揮出して
馬の平首志てうち討打れは馬は虚空へ向て頭を
引立尾髪を振りて嘶きけれは左衛門佐馬の前へ立
向ひて急度睨ミ付るを見て四蹄を折て人間の畏
るゝ如く成るを見て幸村も機嫌能く打笑ひて馬も
人も甚色を知りて兼伏せるは神備の方まし處へ引ゝ

と云者を以てと居北道を歩く鞆より見て勇
思と唱へしと八寸七分の上田字を将君もしもんの
覗ひ時に木村轡律に向て次第に懸き勇士を
討ちし事は死にても勝れぬとも当社の若さん小若
狭の宗将の合戦を為させる事の始末之木村イテ深
出し将軍を手向へ下馬出しは武者三千廿よ父名
春つは此は御用と躍立て投掛高級めるが大坂陣
味をといはれれは是迷立出る左衛門佐木村当時御奴
の勇士の体躍付の哀しき常に見別し敵味方とも
に感心し入て竈従しける知父安房守名木村は嫡

龍松に勝手掛木村を見て一下脱二脱急後あるが武者
は鬼を歎く左衛門佐鉛日に雲の消るが如く
振りたも本に家に手を突て相にて安房守も年くと
笑ふ事二三度有て後嘉年三十一歳の木村をヤイ
己童の分として何を以て嘆き出るを誰と許して
出馬して旅何方に一戦を励む計に只今旅を定め謝に
對して御曹の陣へ何も何にとて四掛りは左衛門佐
頭を上げて申足いは其上身は清存せさと相互へしり
伊勢侍の若此兼原いて丸立ては早速被れ劉
若狭も討死仕ると関東方旨に御座所を被て兵

ガラス使用

馬賊等を遣して上方勢擱に口へ来て遣ると笑り
一ツとて敵を追り出し又は若狭の弔合戦ならとい
られぬ身日の弓矢抜ては其一に斗り答へては清吉
当を起さる小軍清乱を致候由と音つる云葉
又歌等も軍は終に泳末は去る采配ありても涼末ゟ
大将の器ゟ無れ入長者よりいまた軍法の初学乃
門に眠て斗是までても亡君武田の名を穢ミし
清性混散すれ何程文稲の稽れし武士ナりも又勇有
も勝負を覚ん者ゟて三十を越しても足跡以下
へハ采配清免ぬけりしも比でハ人天命を不知しては
人数を出る事不叶童甚方も當年三十一歳化人ゟ
走て當年ゟ采配傳授大将の位を不覚悟る事な
れ共昌幸子の忠まて引かれた書状等村ゟ三十騎る
を侍益も軍道の奥儀を傳へてと云れども大功の
兵家の指軍道ゟ上の奥味落く末代ゟ至り兵軍乃
道跡ゟて国を懸むハ一寸一分動つミなき軍法の線罪
準縄也故房ゟの心の親跡ゟ始る事迷惑し来年経
来る年経とくと海ゟ生が分を見定め傳授せんと
思ひし内東西の変に爰に至て唯今不図乱れいと有ても
是斗ハ叶らぬ事中く已に筆の及し斗の武道振り

を家来共か聞しるふまてなきは何事ぞと
昌幸の公儀を離内に左京佐間よりて父上の御意
なりとし其事天正十一年の冬十四歳の初陣に父上の
先駆しなられ家兄伊豆守信幸は屋代に於て戦れ長
沼口の後詰に出て終ひ勝敗の一大事不知生死の安
否知らんと幸村一夜を明し兄上の後巻上杉の誠
後勢芋川大回を始として諸々に征討し兄伝
者を敵軍の虜にせさるか緒（ヒモトキ）軍と後天正十八年
太閤の華東北条責の撤に父上の名代と小田
勢の先駆八王寺の責口にて聊の高名を取し

太閤より豊臣ト従五位の上左衛門佐に叙任せられ
羅八州に大概は弓矢の知る人多くは婿男なる伊豆
守徳川方よりは先年より疎くしく思寄なる事賞ては
父の法意悲しく軍配奥彦の御待殿有を不甚は五十
にして天命を知るといへる孔子の詞も九々
の内討死せいふ共甲斐掘出て軍配は法傳状なく共
采配を不許兄と死を併んとする上杉の猪俣能く
の其か家来共相共に三百人の士卒を以て三万の勢
を崩さん事諏訪戸隠も御照覧毛頭相違有間
敷と憚りしる公下に安房守も不路頭童の智恵には

ガラス使用

惆悵し ヤア景村汝は天正十年の長沼飯山口の戦を今日迄も武功の勝負と思ひしは不便し 城主の運氣に係て汝が母たりし昌幸が言葉無けまで二人の子を捨殺すると覚しを呵り付ては延しれ云真田の名代の役を思ひ此昌幸が策出して飯山の城上杉將とるを一條に責落し當方を入置一騎を上りて遣苔岩谷の兵粮材に信者海野丸巻上杉景勝を万騎の皆を以て一國しる誅伐の國々を解しれ忘れしは是乃道筋に飯山を取れしるか馬上に將も一時の軍配石戦して越後路を退きしは飯山

城を汝等を兄弟名代物語にもしは北陸東海西國の響に真田が七分の強みとは不知云ふも其時まても小將と云ふ軍配の心の雫は嘗（ナメ）覚へんと例へても勝がに成ても童稚此に戦を好む所が其才十過の勘論よ景村ハツト頭を下ケ然らは某などは其身は畏足に仕ぶ昌幸高笑ひして汝景村が周北の体を其身へ掛て分別しては汝一才く择大將其才の軍配と云ふ智仁信勇忠の其内汝は勇の一才を具ちてといらんも親と等の具偏大臣にて一城の主となる所存を顕んあるに諸の備偏の好しかと一才の半才も不及れり

や匹夫の勇先登へ至んと荒まりしを御身命を抛ち一死致命の地を占ん士卒の業や将師の勇而さへ大将の内勇まていなしと欷歔嗚咽さる面々而嗚嘘をなしかく定めかく問フヨリ見伊豆守信者は大将の内一つも二つも具足せば言は昌幸寛示と笑ひヲ、智勇は大将を娟と思ひ大将も具ししらんた處佐問（嵯ノ字落カ本ノマヽ）よるとまい清氏負何の智勇はとこそ、嵩痒伊豆守いくさ大将を具ちん心と云はせも不果昌者頭を振って云まいく大将の形を詞み称して云こ則は智は不乱に仁は能忠人ヲ信は不失は朋ヲ勇は不て抱ス忠は不二ん

将六大将より伊豆守なる人傑とする家康公の篤を見すさかく達いてより忠節図を不乱是智之若年より士民を忠して不怨しあそれに父子別れる其七月伊豆守が舌朱一人として某方つとも不付して昌幸か供せし内より七十人者村ヶ家来となく浙延十人百人不足ぬりを云と東へくる信者之己とくゆ妻子兄弟一族を捨て属せし知は如何是伊豆守か仁は非ずや一殺一多の議み不て流ル累年月の言葉の情を人の慰れ候して又は寛仁の篤と成る忠を云ふは徳川譜代の臣みなくもなく乗れより将来年男耳似載して石田ヶ讒

ガラス使用

文章抔の加判と列一回てみす此者ひな見向もよしや
家ハ一度の味方御所の流石も内ハと思ひ過しつる君
臣の信も忠も守ハ臆なし其勇ますれバハ士の勇気
大将の勇気なきハ不残も恥を得ある信者ハ軍配れ
を一家の将の器に過ぎたりとかかる童もはやりか
まし と又男者に嘆しつる たる佐者ハ物思ひ気
に云入しを安房守ハ見送り欣然として蟠龍松の
枝葉を揃りて揃形つて無れ共此松ハ元形長かし
を花葉時を不知と飄ひ出し定たきものと呼ひ同
定たきものと云しハ真田か人を激せし事次郎原の候

きしつる士之ハツと云ふや庭に下り続ハ安房守か
花葉時を不分守りの時至りても一千年の之重乃
内に深しと有るハ男者の命の成ハ雪中々何と花葉
のならぬいの形を生を東へ下しつる一の枝なれ男者魂
魂と実性ある抛しけし蟠龍松の元来の枝としても常へそ
うる物なれとも西へさしつる二の枝ハ家経くして
親に揃を実張りさかりし木ぶりも葉向も守と守
に枝をしめりて去なく伸来く常ハ雅も角も陳れ
一人の勢力ともなりん小人の操智勇士に相生の松
目出度と飄ひ出し飄ひ出し一人に家定生死得道の

軍配を以て防かしむる真田親子か軍道の修様
實に妙勢の兵なり
是を真田か松柏の信様といふものた其後此村
此引にて如文を覚居らしとそ
其後関東の華東皆當所諸を攻落しけれは安
房守に石橋寺を登れは九月十四日の諸手営十四日
再ひて押付君関東方ては大将関東十日勝ともや
内府公したのに諸苦労なき諸倉戦一際諸将利の争
宮方遙か可笑しきに當所牀の戦は畢竟伊豆守武功
他を云の事暦りしも伊豆々の一盛名戦伊豆守
一手又諸口の利運も伊豆守一手請取陣より本多
忠勝見届の諸使申付て其柄となりしも云は縁
若年の事なれは大名中是を持ての心より記して
諸軍若なる大将軍を思ふと云ふ矢を用る
安房守に二の上方一味なれは若諸跡を慕ふて
木曽路の難所の場を合留ての一戦ふれは雪場と遠
中仙道第一の難所と真田か居図と云若年か武田
越へ住へて此の地の利害知り居る事なれは
かく関東の味方本役や親色は思立と寛殿臣
の如く信州大名保科淡路守伊奈まて應光寺勤

ゑ情知久長称方より退く乱御を修めし也誠るるに
木曽郡の内も木曽八郎太郎ハ累代の訓深あり
奥郡の士民兆状を論じひ真田表を安堵し候より
に於ては木曽の猫仍まて有遁りと為居旅を功
墓中の安證保科正光る伊奈衆を語らし召置へ
出太子帰路へて池の先生物を書しは知の
仕合在る迄引き然し猶更の陣へて志ハ御真田方
より留吹旅を立功ひよの何午が是非相に候へ旅
在待者中ハ真田表に召矢せしハて我々先陣を仕
り木曽路へ参りける馬の口を引せ中ハ先年御分回

之字入ヲ本ニ

の前御幕下の御訓深とや別て内府公天正十年の
春に至り甲信両国へ御出入の節我等初より乃
御味方して事御失念ハなき旨兼事に定め蒙来
り回路の後ハ両人の習ひ信州為引に定る合濁り
真田のにく御催促よハ諸ひは也おかしも御味
よ不来存御下知次第との早事一日の内に二度と
来る在ひて再ひ評定有て兎角ハ他の木曽路乃
小勢よりハ後に変りて強勢の真田安房を攻
とけ御後を心易く木曽へ御掛りて然との令議
に依て途に真田方へ弓矢を御仕掛の事悪く武功

十三
冬

の様子より起りて時節とは云ながら偏鄙の遠離成の
上大手の合戦は脱れ給へり
斯て上田城を攻られ巻との事なれば軍評定有て新
旗大名九備を以て巻詰本陣と定め十三段の結
備は惣軍と所々出し伊豆守は北伏を組出し不意
の奇兵を以て挿との案内者より弟探軍の職を乱れ統
擾しけり

于時平岩主計頭討死すとは真田城へ軍使を遣はし可
然は秋先年より武田上杉両家の弓矢一戦にも及ぶの
旨は双方より戦場見立の音問ありて定め時日
の申合相議後一戦あるべしとは軍川の至地に討なは来
天正十二年の春より十八年の冬迄甲州流代官として
在甲府の旨委細に兼る平岩表真田安房守
は是迄も徳川北条の甲信上の三ヶ国の弓矢を以て戦
不止上杉皆は川中島に旗本立関東の乱軍年
月を経る其上是を真田弓矢の様子人と號
上州は北条甲信二ヶ国は家康旗を討立しける
川中島二郡は上杉家出張の手持に引分弓矢を
納し真田安房守は其の節目を存之き北条氏
政は信玄の聟と又謙信の甥之家継しける武田は信玄

ガラス使用

昭和の孫小越の宗緒ハ常希緒和の妹舞を上信云
流二男ハ海野の名跡龍覚ハ盲人にてありしか武田家
老の勝より越後へ立退上杉家の命抱しられも存し
亡君武田の後縁中幽斗の角の牽と誤察しても
真田ハ父祐幸田諸徳川に下り古傍出の甲州士悉く
属せしに于家の隠裏八州の治乱と中をれ之治昌
書の根本とも小東民生を家康公の羅と結んで漸く
静謐の功を成就せしハ適し忠勇の安房なす事へ也
只今黄門市ら馬を上立の上ハ一族の諸音同て悉と相
集ハ皆光と感んし諸使の報ハ

此度江戸中納言秀忠卿老父家康大臣の戦ニ
若を会せ下らしめ嫡子の将として中山道を赤ら上
るか伊勢路（諸字入ル本モ）二ケ所の諸戦と方一味の真田なれハ予
夫れる武の習なし真田をたも然し此表を出よ赤
も無るに於てハ甚方予夫に秀忠恐きて孫侯の
勢押ハ中山道の先導となん事を思ひ兵馬を遣
起る騒擾の加に真田城へ一矢射込る様にと先ニ一
面へ（中付る所へ保房州の将伊豆守此麾に依在る
より鋭閃君臣の便もなきかくそれ真田城を立出
嫡子勢の旗軍を諸き陣中への或代りて上使諸に

へ申せ入を可止物之と急度法度を触立しか
上田太守の物頭山田喜知平当田を修へて望月与平次
本丸より来り清口上を兼て安房守へ搦手出折ふ
真田は家老高橋民部に向て六郎の十四家を説ゆ
せなわくさも常衆出居諸勢に同春の桐に律韻の春
義に添て居たりしか望月か口上を伺と等しく幸く
と笑てやれし世浣春に及ぶは不思しか故は日は西
より出て日没は東之角かな軍の兵法何物やと思と
泊児弓矢の法にて甘く熟説は争ひかとなわても気る
まい江戸黄門生れて候の嘗すか君臣の節目なる家
とは真田に向て存外の口上御身の君たる家は源形
なし只明巻の生仕にて方六尺の一室に法性院信玄
の讃画を入れて木像に営ちし我家の生稿し云正成
とも哭てしる太閤の軍配秘法の指子由緒のたゆに
立てる二方の人は生死存亡進退動静勝敗得失合
二方究有るといへとも納まる所は二方も三方もなく唯（ユイ）一人
の我か君へ存（ス）か主と捨しては座し臥しては立旦夕
寝寐も忘却せ信玄の清恩ましに濁ぬ徳川の流を
汲んだらヤア与平次濁流の水は日本ては何国に有ふ
耳か洗ひよいそと空嘯て欺く聞しか望月与平次何と

中でも敵陣よりの大将の音問の使弓矢の流儀共は
ぬ何にはいふとも此れは女房なるべしと眼をむき出し
使にやさんと若は獅子の大将と呼れは家康の若息
と相成途中を廻る出張いよ方一味のさつとし
次文治後は親仁の家康までにさるに弓矢をはなれて
若年者をせよめしてれ比類之者と云はれぬ兄分と
捧ぬ真田に構へ来るは癖者なれは矢への鏃式は
知ルまし扨此れ此方より途の次に童を出し案内せん
とやせたる佐竹村は何国に在りや菜畑の小雀
共か細を好む急せ折性乗配ふるるは及ぬなり一下

馬場に案内し高城への道を教へよとやれ近
年は上田領不作此年あまりや百姓共耕作に苦しむ
みんなる国も不残之しの来年は糒に喜も出来田も満
作なるべし豆斗喰せ案内に肥たる馬米共を積ん
武蔵下総上総の米沢山の国士共か喰肥したる討死
の死骸は田地の助ケくれん共真田か女房にも捨ヶ果
よる男に問さ愚なしとか云ふきの小悴と弓矢をれ
云ふよふなるなり役はアヽ片腹痛の勝にかなはよふ
那りとも或は少しも不構して居たる真田は斎代乃
岳成里

去程ニ櫛ニ勢の先ニ取て大名九條合相續しける
に一回一城の大敵までも悉く御本陣の御下知を守
り諸ニ一同の惣責と云もて眞田佐の大名有
た程ニ勝負軍立瀬東方が敵味方ハ不及や
別而叢面ハ岸田上杉軍の辻回之しに百姓迄も
軍の見物上ニあり後日の評判も恥いさや本陣に
諸番労を一功不手掛九頭まて一ニ切りの軍せん
實ならと九條の大名合手出て寵れまく責ある九
頭と云へとも諏訪家と土佐家ハ人数合ハ譜代ハ多
られとも浪人分の体なり代ハ小笠原左衛佐守万石
の小城之岡部と日光も勝り遠江ぬ知行高些内とも
大城と云ハ筒井伊賀守伊賀の國主の事と云跡ニ
當時胙の不て際もあり他人ニ譲られぬ一番合戦
一の寵ハ又中せよ一ニ五百人其外八頭二の丸廻
りの寵あれと靜々と押ある御本陣よりも軍使
在所ニ眞田安房守ニ恩を激されしる上ハ吹
先手の大名九頭左候て御中合一ニ際六條の條
よりハ諸譜代大名諸旗本跡在ハ人馬て敵在他國の
合戦ハ於より後口ゟ六ッ番られ君盤石の後陣と合
おしも不疑をこえある

于時真田左衛門佐幸村ハいつも軍始めの御家来なるに
父安房守よりも一馬場等と名乃関東皆を蹴
散らせと使立てするを竹と等しく二の丸ニ有ける
手の者三百人勝早あらよと云様々躁揉ミ胴丸
着て小手きてさるハ可皆張く了村との思ひへ甲を
石野素白ニ陣屋引ノ早あ立出る処へ本丸より安
房守窪山市左衛門差を大阪討伝ハ若手の中ニ本多
平八郎来ると有る定ヤ中書将の平八なる一如く
親中書忠勝ハ強節を安て若年の頃唯一度諸親
見ゑ系振舞ニ陣の手際を備动なから一手見しく親

中書よりも手に肉続きと覚へしかり勢ひ上方の強
兵を知る将ニ出東海道を立回小陰七列の内より此安房守
昌幸と本多忠勝二人の強よハ知れしる事小将を
老とし甚忠勝よりまさ強年ハ見負の平八ニ生命を
素白野の左衛門佐実癖あてハ汲ミなりける譲り無し
猿猴寄を可致依家ニ宗教の強留め付しハ我覚有て
の事然猿猴寄なるよりの達せ得ニハとサス左衛門佐幸
くと笑ひ然としてハ蔭ニ止るとハ能もく立てる唐
人の言ひ発つニ依ても幸村を知る其音の思ひ市
左衛門家老出る何子の本多の強節親本多より上る

去れはとてこりや子の真田か勇ハ譜の真田より尖キ
とハ知れてゐる事　野陣山陣旅道の外寒中の寒さを
険しき奇兵の横矢に尾越山越の流れ矢嫌ふ家
弱の士の用る頬当より昔村なとハ不自由嫌ひになる
き事ハ一生禁物なり去るとてハ又寒さに止る書を
讀く取かく新の家老ィ昔骨なふ構心の作の武具好
と我作と云不孝の二字ハ勿体なし頬当ハ猿頬咽
漏咽也涙掛進れぬ程に掛甲の上に詳忠し
又えとよに掩をしてまかしろとて中よと越れ笑ッて
太よ一出此ハ早馬出しこれ赤枕の大旗に六文銭を
付たるを飄と并ヶ弓鉄炮を左右一組合押出せ
ハ緋方にハ馬印唐人笠に赤て付たる押立勇置を
引立しり昔村ハ静しと近寄りよ洞をされて馬上の
呪文あり唱へ察出せハいつの間かハ劉櫓の挟間押
茶坊主父房まは思者ハ孫にて織りの甘蕉羽織を召
し陶淵明か烏角巾とも云ッ混紙張りの烏帽子
頭巾をしつ引つ蟠龍松の枯枝擔んて頬杖突き
磨の上さきの眼を見出しヤア童か馬の宗頬首途の
よ洞の頼り鞍か続いて思案も極しる韻付よ一物
有りなと去本の果敵ハ云てよッ言葉の果敵をんよ

無退の節を不知せよ自然の高名を得て好合日
の旗をは七分の勝利風の従ニく無也旗の手返ぉ
をはて禁ス引ある時は男者寝て居ても人ては志
とすく勝負をわる事は用士卒を出ス大将乃器
無也を不動事如大岳進ル時は江河の水の如く不
滞変化スル時は如天地不知の号令厳重は雷電の
如くなるへし賞罰を行ふは四時の節序を如不違
策を出すは如鬼神亡ひても然あし死ぉるとみせ
き然く生き弱く思はせよ然く強かるへし危きみ
勝んを然安ゝ示し勝を疑変心の軍配浅ヵ引具ス三

百は五分の不知まは三千人八分の不知まは三万人と所
変六臨の十四変は毎朝日課の間ん観察不及ム
指変の動静廿ア進ツく葉柔強きを以十九年法
勝況敗情指南まて生陣の押ぉ戦首途の機勝
利は只今ぉよて傳つ張陽二字の機瑞を揃ツて合
瑞の三機粉は析柄共到播ツリヤさんしてうとぉ
出ス三河国み者村は戦量より国現し日潤っいぞ深
出しきれは三百人の目の若も父母者ヵぉツと戦み
自然と勝利の音にて勇ミいさんで出立危
陣中出戦の始メ人王五十代桓武天皇
の御宇延暦元年

ガラス使用

此年氷上川継謀叛有て坂上の刈田丸傳ふ将
軍の職を譲る此時太子親王の中に悪念是多
き有し日本武尊より是れ未悪く王子親王
此職に任し給ふ延暦二年五月廿日八幡神詫
有て大自在王菩薩と奉号此旨神楽奏す
る太鼓を打んて刈田丸先陣に打せ兵家を勇
しむといへとも其法同時代延暦十四年乙亥坂
上田村丸人臣として始て征夷将軍の号有
是後陣中将軍家出陣官軍の陣中斗用ひ
より時の太鼓を打始は人王七十六代近衛院
の御宇仁平三年兵庫頭頼政鵺を射る時ゟ
始る其後人皇八十二代後鳥羽院の御宇元
暦元年九郎御曹司義経兄頼朝の代官と
して上洛の節宇治川に臨て東国勢喧しき
事物音心へさりしを義経大悦をなして伊勢
三郎太鼓三ツ打陣中の騒きしつまる是より
始る

関東方備配筒井先陣ニ定ル事

附筒井家の士名張ヲ真田幸村討れし付筒井

敗走之事

并関東方安房守ゟ諸勢引返ス事

斯て関東勢の先陣ニ進ミける九備の大将ハ

真先ハ伊賀国上野の城主筒井伊賀守定次百人余

ニて是ニ分ヶ四百人弓鉄炮物頭ニハ長沢甚五郎

と堀覚左衛門二人ハ筒井ヵ秘蔵の士大将ニてハ名

張八郎左衛門とて代々勇士の覚へある時ゝの国を

固護の出陣ニハ国人の組頭ニ当ハ諸士まと七百

人ハ諸士物当時の恥辱を雪き信濃国の鬼神

とやつる真田親子返迄付入りニ上田城を責落せ

と二ヶ所の總軍ニ備て平ヶ押ニ掛る處へ城内より

声を出せる真田幸村真先ニ成て一の先ハ穴山

小助を物主として弓鉄炮十五人（六人弓 九人鉄炮）三組ニ分一所ニ

ニ跡を深いて左右へ立騎馬十騎ハ根来頭アちこ

ニ寄りを仕掛て長柄鉄炮の入総の跡を物主小助

脱諸て百人一の先手より上の鰭有りと筒井ヵ先

手四百人ハて討取らんとしける所二の手ハ左衛門佐幸

村長柄の鑓を三拾本宛真先へ突掛へさせ馬廻

持弓持筒十挺ツゝ添て二足を跡へ引付放ち窮ニ起

りしハ中ゝ目ニハ力量有て同ちの利ヲ若者揃ツて

廿人馬出すに立しめしか六人衆の旗の本様を八角
六角四くに搆させ衆本は惣者竹立何とも十八九
より廿五六を年長として若手勢をは百人又は十万の
敵陣まて酔ぬ深く氣の強盛その働く勢も屈強
に一際勝れし兵氣之三歩は必得者か同利まて次
郎家の誂役と為を仕出し采配代り室閑定まて覚ん
の諸馬武者は指諸は場負の高名十度よりおき
いなく諸馬の分まは信濃は抽ぬ廻回に多くは有る
者と聞得あるも不得諸馬はゆえとる馬上の覚え
者触結軍の見物引上て討れ魁殿称見は歩家之と
扨も撫むる兵見しいかな張る敵大敵も難破陣を
三角にしりて巴に眼ニ斎兵正兵横進の入違ふ相
图の備を不知して小勢と斗見こなして筒井の勢
手ぬ百先を先へとおし付を掛り渕藝上けしより
色
真田か一ノ手穴山小助諸れたる乙の渕を合せしか充
筒井伊賀守も此すし見を皆は微なる真田か誘敵
の嗎換なる合せ渕上る声上田方者は飢饉強き
上国境に兵氣落し見へしより早未入れしと采配
ふれは三人ま常にあら謀の先に三浦覚た余つ出地

甚兵衛手の者遠くより弓鉄炮を射かけ立掛ひ掛りて追付を穴山小助組の者共ニ向ひて十間ニより内へ引寄手表へ迫き十四五人ハ討未落とんねへしと云隠雁行の弓鉄炮引なて射手も出て赤こみを傾ヶ掛掛りニ向ひし攘来仕るへき物合ひを〆付て引詰進ミ寄し我如案真田か先手十人斗討射倒と見へしか穴山小助扇を開て向を招く相図ハ寄れと丁行三組の上衆の手より一矢一玉射出し打出しける故首一手武合の弓鉄炮ニ筒井か先手百八拾人一度ニ打てハ討手倒割へ彼表へ進んても不知也し三隔覚たる者ハ真従ゟ無ニ未落されて乱上りて長坂甚兵衛か屏風倒しニ馬倒れて下りゐて退きたるか偽りかはきそ手衆の精兵沢山なるそ逆ふる退と不知也しハ拵も不便の物となり

進退の差曲当るると云ハ可進時を見て進ミて退を見て退く事兵家の常之と云へ共ケ様の節ハ追合の物謂と云て未す軍とハ不云鉄を入て後を戦と云郷もケ様の節を弓鉄炮の者共を跡たゑへ集手ニ廻らせ味方ハ鉄を入続様ニ組の者を下知し後ろへて我か物

ガラス使用

合の槍数百本ハ鑓を入させ突立ん事を心掛
又組の若者ニ若干の強勢者を当分起し突せ
立て振つて掛れハ筒を構よと下知し大音ニ
かさなれる事先ニ物頭の働き成るを敵を
崩し味方を退かせるハ長地甚五郎之業ニ
而為存って偽物見えて何将の境之と云々
越るニ穴山小助家来若干集来の筒井か先ニ追
と見るより跡ニ立しる十騎の武者を招きながら小助
ハ馬飛の鑓を入るより早く突入勝すと筒井か歩行
武者七八人打き倒して証入りしを長地甚五郎馬を
射させ歩行戦の鑓を心掛しか穴山小助是を能敵て
と鑓を取るや否や入来るを馬を背らせ一突
振り所縁付て上を突んとするニ甚五郎か鑓を筋
違ニ柄へ差させ乗りながら抜き打ニ甚五郎をは
袈裟ニ切り居ると小助か若党の七助と云者蹴倒
して首とれてさゝげ上しより穴山組の十騎馬武者合
武功の勇士なれハ突入るより突立て雄声を上て
打き出せハ筒井か先ニ四百人立出も洞とゆるされハ
裏しと討突崩二の手ニ押へし名張八郎たまつて番
人の侍者へなりと老返しを猪虎口の採立て真田か

ガラス使用

家康は旗手の纏甲乙二百の相図の大戦事も起ら
さる所内に十騎の諸馬と穴山小助鞍を突抜き手
の方二三十間突掛りて馬上の強敵息絶して頭うし
ろ長は下知もならねと穴山か三股雁次の九十人三人
の肝へ入るも廻も知らさる二度の返す退張炮は不
足不揃静くと十間に余り進むと見へしか其比張炮
射出しける皆只今筒井か二の手の名張か備へ崩れ退れ
と押寄先手の後軍の兵共茶魚の如くの其中へ射
出来廻もし縦に二合一手の九十挺又五百人斗倒るゝ
やら血煙り立てゝ見ゆると名張か二の手も五百人
斗なく崩れ名張八郎左衛門大に怒て臆病の関士共
先手の奴ばらか敵より増しと云侭に崩れ掛る味方の
者を引続き人城を出事四五人正面に翔けれは其
四五人の太刀振持真田か先手の穴山組を幟を振ふ
るゝ切拂ひ爭しは人間よりは見へさりし処真田方
の武術成者を九人迄切伏せ七八人に手を負せ退
立て切崩れは一町斗突立しる処を見て取返名張
突立て討りしは伊賀国の住人名張の代々八郎の二字
は不放新田家の手に属ちし十六騎の平内之と名張
八郎か末葉にて八郎左衛門時なとは我事之代々鳥獣

ガラス使用

を拵れて佗國を知らぬの山家者軍引さるは續て
皆真田よりは岡許よりも佗人々に見て來ヤッと呼はつて
り揃き廣云はれ討れけと宗山十騎の覺の士渡り
合せ二ツに成り延合せかゝり刑覺驚入しる勇士乃
しか左衛門佐幸村退くと見ゆるを等しく勝の
扇を翻し采を三丁返くの味方を制し形かゝ競馬鉦
に息を入れさせ衆付しむも流石諸馬の勇士白沫（アハ）喰（カ）
んを衆居へしり飛おり形のゝまし水飼へと云より早
く馬の口ら首に持タせし其鎗押れり名張よいやも
おまゝに覺ゆる謝兵真田に迫ん見し來との有の刀

勢を卸しより猪狩として紫崎ヶ早歩戦をおまゝに
好むは士卒の事なれる幸村いゝなれ共名張ゝ方の
武勇に免し真田幸村イサと鎗まて立向ふを名張
覺ゑしと突ゝて某云は鎗を不持合何んても物と
太刀振上て向ひ合ふ左衛門佐鎗を抛へて暫しと聲
掛ゝき渡は太刀まて某は鎗とちれは長ヵは其者鎗
の太刀よりは劣るゝは太刀とれ替へは猶と云れて
名張笑ゝて拗く神妙なる真田殿御來云は太刀の方
の様り付ゝて鎗より物倒し來殿の心へいゝなれは鑓
貞を抛へて道具の吟味と云はせも果れ幸村云様

者なりし伊賀國ハ遠國なれハ又吉原ヵ甲州武田ニ
赤鬼と云れし飯冨兵部と云し者去ル永禄二年の比
信玄公より新任ハ武士たる者の一諸合の勝負ニ道
具の長短有てハ損益の比興ありんか此儀いかにと武
臣の諸吟味ありし其列座ハ內藤馬場淺利山本道
鬼ハ吟味の判者甘利討死板垣死後飯冨兵部長
老となる故押れを撰しハ凡武士者の勝負ニ道具の長
短により損益ニ好悪有らんハ至極の比興なる儀也
兵法ハ短長ヵ長しといへとも其物ニ何れもしてハ利
難けれ太刀刀ハ短しといへ共得手ならんハ利有へし
然ハ真剣の勝負ハ道具ニ不依業ニよるへしといへは
物の道具ニて勝負を争ふ甲乙の僉議長短ニ不
依と申出けるを山本道鬼を始諸人の事を申上し
かれ是判断任せ百足の間へ張紙出しより以来甲信
両國ハ不及申北國東國武士たらん者ハ近代武田乃
式を規矩として武道の吟味捌隙無く若き者此る様
知なくてハ真田喜兵衛ヵ長道具をハ比興と思ハん
侭も太刀を逆ニ持す仕まへと為り居ける信濃士も
武士乃吟味猿き故之名張也ま穂すれハ又方の
謗を止めて太刀まてと申し太刀未ハ願ていふ此名張

とハ斟酌もなんと捨ばならぬ鑓なれとも流石の吉村も
名張殿の強力まハんハ敵して太刀打ハ叶ふましと又
吉村ヵ捨鑓の軍配ハ此時と見るかゝしと打かゝる
勇士とハ見れ乍ら弓矢の古実を知らぬ下ヵ士卒迄も
兎も太刀しる者ハ敵ニ向ふ時ハ打物業大切の打
物とハ長刀を云て如し又諸馬の武士の道具
とハ鑓をさしいハ古禮ニ道具持とハ鑓持之太刀を
以て振る事なしもの也と思して大将自身の生死の場
引あくる時用之鑓を捨ても長刀を太刀も大将信濃ニ
相劣らぬ海野左京太夫義吉ヵ嫡孫真田安房守ヵ二
男左馬之佐吉村ニ弓矢の覚悟ハ推し来ると云葉ニ
かさをかるより早く二つき三つきつき出ル鑓をハ打
ふくと柄鳴りもさゝへと上中下の三段ハ敵の位を見
廻れ透間掛声もらしくあくる所を名張いらつて打
こむ太刀を飛退て穂先て受へ払もしくと敵も味方
も目を不放片唾を呑て見物する名張ハ強力
ニ任せ吉村ヵ鑓を打き落してツットつけ入と打のハれた
稀し四五度入替しヵ太刀の癖早業まて透間もな
く真田ヵ鑓を繰り入ニ来る知を左馬之佐元来の
取尤しの名人なれハ片足飛んで名張ヵ後ニ立よと

見へしが鎗の柄元を抓み突に太男の名張八郎左衛門
うつ伏に石突をん突伏せ踏て立しる左衛門佐兵
鎗が上にを入身が掛てを留るを人をと云聲志あれ
止させ給

梅若村は一息継て又昌若の許容に伊豆守は智仁
勇足ちしと有之は此左衛門佐も先々今日が仁心の初め
強敵なれど可助が好が一云鎗を捨て太刀ぬきと云し
を鎗すでに仕止しは心掛りコリヤ名張よ息々延命長
久みさて本國伊賀へ立帰りて子孫へ云傳に信州
左衛門佐若村に斤て突に討突外割へてと命助が生
死の二方を見さて来りと一門一家に恥辱せよと引立て
突出せしは無はなかりと背を探り目禮して乍引て行
生け捕此方へ此よしを見て馬前の武人張りて十二本の
とかり矢を陰おいなおくは此の節を通し味方何人討
つきいら又高名に伊達をさりと若衆は不老と口説
ながら壹丁餘一方塚に引つる名張が淺手に當るとん
つ死が鬼の様なる名張八郎左衛門佐兵にかゝると卯て
二言と云せん射殺しける梅も射けりやしくと上田勢
皆々は伊賀勢も誰れ射ける遠矢の名人梅もしくと
一同に讃しけるは程遠しける有様之若村本々と笑て

ガラス使用

今日ハ終りし名張か十死日か往亡日か助ヶても生られ
ぬ是非ニ及ハぬ運命之際起引々と又赤糸や穴
山金月担へしる筒井伊賀守か旗本目掛や魚鱗色（孝り）
か三備ハ密ニ整と肩を風抑る押金めハ七百
斗の筒井か旗本三備も長蛇も討手を乱れ抑ふる
名張主従の死を遂ヶ力も抜ヶてや左衛門佐か部面
ニ来る三百人の小備大山の崩れ掛るも斯くと呼合
く論を見捨きよらし顔の蒼き度を幸村見
皆ニ矢玉をも進ミ出閑を吐と上させ然ニ来るハ
筒井か旗ソリヤ脊を斥ニ突ニせらてる真田ハ人間
ニさるはなきと伊賀越山城唯主人ニまて赤[illegible]しよる
名張境之人唯一騎ニ突倒せハ百人力ハ樵之と寄
走引すらしる筒井桐備の陣中ニも半町七町究竟
出させちてハ只一揚の合戦ニ武勇の真田ニおそれ
ル也

去程ニも関東勢の先陣二の手組の日比ハ乗ヶ一備
少しも不除せやかハ子共の左衛門佐父の真田と同し
かゝれハ小勢と云見度せハ諸馬おし跳りて漂
ふ所を除を撫へて突入よとも知しなから然なを見
テ幸村ハ穴山小助か手へ使を立て互方ハ草臥

廻の軍も幾度との王寨寄脱先ん踏出ん上ハ此所ニ
敵を一薙ぎし某村ヶ旗本まで微塵にせんとたち六
旗本の長柄を外させ悪く打乗せ至成も馬より下
り立て馬をハ三走紫翁言ニ後ニ引立古人の中間を
前並にして床机ニ縄手掛ヶ三丁斗の敵合を出て
人とも思いぬ氣色ハ勇ニ抜てハ父兄ニ試しる者
村之く集まる敵合を猿と見て其の者共ニ下知し
此敵合ハ手先より遠くかゝり掛ると嗤ニ見て立騎馬を
真先へ立歩行武者流に續くと見るハ馬武者鯱
務し歩行を詰まで実崩さんとのやすく兜を脱ぐ蹺

ニ稠りより六十人ハ鎗詰して立上り際ニ二三丈ツヽ
馬を突落し跡馬を突落し先へ進ミハ中間とも
將を従へ打殺し是ヲ進ミ凡正兵の馬戦奇兵乃
歩戦ニ不可叶とハ卑戦（シセン）公ヶ秘せし佃物謂ケ繁原
を渕無から谷の下二てをハ死馬まて埋めんとと
士卒を諫めし云葉の采配只百人の一塊の濱岡山
の北より出へしぬくまく冷しき武勇之是程のた
ましひとハ未多人不知日振兆織治小栗曽根大石不
足の二ヶ廻まて五分一の勢と見せし あるの牟 三騎
たるしと紫の冒知を不及下知ニ六捨人と長柄を添まの

せなかに四五間程も居形りみ纏んで五千六騎の茶迎
際まで聲をかけ立上り突出れ穂先ひとつにも揃へ先
も揃へて五十三也突とる馬の倒るゝ時ハ伴の茶人を落
して泣出れば半分までに馬上の侍三人ハ落しける所
ふみで胸を足にて折きて起も上らぬ處を半にて働
より真内村下知して其手の角将を持まる中々
茶を以て打殺して捨られば茶人ハ百張計の殺馬
ハ四千之餘倒れより先列馬を突倒しける六十本の
鑓ハたりへ分け及ひしも百五十名佐の旗机の方を
守り諸下知を待て遠く百追ひ抱へて見居大将

まりして甲州流の六分の備を常とし七分の備を立
しかとせて八分は危しと去てる信玄流の真田かに
の若常く敵々しの兵者立之
二の手の小楽笠原の甲配にて書手の方より胴鉛
百人餘りを以て力身にて諸の備倉を好にて寄て聲
を上て来るれば皆々討死覚悟の大列の其名れば此
者共にて出合ては左右の佐馬出ての先るを半討死出来
べしと敵の武者立を見るより早く眺察せしかば聖
月半右衛門馬茶の手にて是かりは其言へ走せ城下
に帰りは備を中しあると云と唇乙にか持量の器ま

また有ける其月ハ以後騎馬を穴山小助九十人乃
弓鉄炮ハ配りて三挺ツヽ騎馬壱人添長くと立へし
かくて左衛門佐幸村を河辺ニ床几を立させ馬ニ添
まて前馬出す百人の内長柄の六本ありて囲ませ陣
固の騎馬屏風ニ添ヘ引上る所へ小泉曾根等か陣
ニより近出る大将岡部諏訪出雲守来より来
よりて左衛門佐も弐巻んと出る事あらす六百人ばかり
穴山の兄助り続くして幸村退口をハ守て騎馬を
立出して九備ありて引上ける所一向左衛門佐か馬出す
を見て取る事不成然ニ上田城所にて追延んと虎口

を設けん巻つく見て知へハ父安房守昌幸ハ此節本丸
ニ有りしか城上の雲気を眺め驚して詳察して諸臣
の後太陽の合く是西ニ不収の形ハコリヤ又竜か勝を
得とせん武蔵北京の木の葉士を追散し面白き
勝り引落る所へか海龍色跡の争斗なれハ命ニおね
を乱をなし若者穴山か竜と連立て慄き思る好る
者ハ宇都宮壱人ありて先引ニ総勢事不足ニ治
より例（レイ）兼（ケン）四組但し六百人の歩卒中間ぼくして足
も築内納りしる普代の角松明ハ跡先ニ火をともし中
を握るハ二百松明と成たるハ壱本宛持てありしハ両

本の松明壹同にあれは百人出れは八百人と見ゆる火か
火を連ねて天地上下左右へ輝ふ四ツの光一倍ありて
二四八方の光りは人の頭も多く見へ物音迄も影遊
似つる物也是ハ先年高坂弾正か真田ニ角飛卿の
傳授の代りに益四ツの燭を傳へしは此事之
高坂弾正ハ工夫仕出し殊ニ石立真田ハ三四度立る
里許下付ぬ関東勢二四の松明真田城より出る事
畑より吹出る雲の若く續くとて石殺しは城中掛か
も出勢と見へけり皆く真田か人数を引具し夜
中の合戦ハ必ん元と各引去し危に関東勢二四
の松明を石和府之女房ら懐にありて居られ去備
立に配りなんとりや真田か出るハしとへへの家
を奪ひけるそ奇代なり

日本一統志巻第九十九終

日本一統志巻第百

目録

真田安房守息左衛門佐幸村之軍配至利及誅謀之事
附川中嶋合戦物語之事
并白黒之碁石薄板東西之吉凶を考事
真田伊豆守信幸上田城ニ押寄事
附太鼓十一挺之事
并信幸幸村相撲之及勝負之事

日本一統志巻第百

真田安房守息左衛門佐究極之軍配并利及諸将
事

附川中嶋合戦物語之事
並白石之碁石弄敵東西之吉凶ヲ考事

去程ニ真田表へ入給しける華東櫛田の府中に於さる
諸の利運を見給ふまて来ト通るそのなかいたゝの
速歸る日数を日本無双の智勇信玄の軍配を諸
将しい我手と軍道自讃の安房守なれハ弓矢の配
を伺先ニ二三度兵馬を出ニ試しか父昌幸ハ大ニ

ともに安房守二男左衛門佐幸村も宮山城を出て戦
しむるに兵風烈しく此時又関東勢上方表に
逃出して單立となり懸隔の相違傍りてありかくて
當日の追合に足軽歩卒七百餘人手負討死三日
目の戦には騎馬将八騎覚の士歩行侍共掛りて足
軽ともに弐百三拾四人關東勢の討死まて真田方
の者共は都合二度の追合に僅四拾人討死り
しも大方末々の歩卒之手負は八拾人もてありし也
ともに痛までも上田の櫓搦先に騎馬の追退陣頭の働
静中く不頼ス兵家もなく今更に恥入り武田方出

の士多しと云中にも此真田壱人に斯程に縦横せん
とは思はさりし如何せんと評定も請合も勝利の事に
疎なり

かゝる所に城中の安房守昌幸は寄手の虚々安危の
軍に時日を移し上方の軍に後れ走せんと可成ことなし
と元来此昌幸は何方へても属せぬ氣志て天下唯我
一人の主君より外に主君はなしといひても惣領伊豆守
は居城沼田其は上田とう時二男左衛門佐幸村は未
弱冠の童にて信濃流の譲り引まて天正十八年の冬
東（際）八王寺口へ進ミしにおいての誉を賞美有しに

いまは廿年の幸村を左衛の叙爵ありて従五位の上
たまはり作と官途の恩を示とし幸村兎角上方一味
と覚悟しける若輩なれとも心底も不便之東西の方へ
い兄弟武人なれともたゝいまは幸村殿二男と云浪人
なれとも某方の抱人ならんは上田も退出しかくて新
又一所の住居ようんし暮さんと世間の風説もたゝ搦く伊
豆なるいやしくも伊勢海の武功諸口の誉と弓矢の塩梅
と鑓權佐上し楫子先す落着しそヤア幸村が如此
眉働し事あやしき事有り兎角い士卒の気を離さ
ぬ大将なるは付ヶ勿体誠の侍の大将と云てあるらん

兵権の軍配親授されり此安房守昌幸なりし日本
六十餘州其権を握らせ四夷八荒を併呑せよと
いふても仕馴ぬ膽なれ共何を云ても光陰出て
六十歳やまへ年は寄りしかと氣丁それいまた昔の氣情
盛りなれ共う楚を移さぬ水鏡顔面の猛頼貴い
荒しうて思くい働しう併馬上の働い早馬駈る事
も若者共に左のみ劣りはせまし妃と相まふ之思ひ
出しう四拾年以前川中嶋の五度目の合戦永禄
四年の九月十日の晴は信玄謙信よ信と見へる
十死一生大猛勇の生摩利支天と人々恐るゝ猛家

ガラス使用

も日本にては古今無双の大将なる上杉は家名を嗣に父の關東の官領職信玄法諱をうけしやミ落髮あるとは世の無常の闇の山妙高山に旅して天正六年越後を治るに神秘の計畧に壮年の髮を剃落し謙信心光灌頂の授戒ありて大阿闍梨權大僧都不識院謙信と号し女色を断つて一生の清僧となし潔白は殺伐の操しうり又其君の信玄は最初は禅学より入道ありて徳榮軒信玄居士と成りて給しが比叡山の執奏にて護摩法執行の後法性院大僧正信玄と號ありて誠に奇代の敵味方服密分達し大將達弓矢の武代陣中の日本武士の兩本營弓矢の月花と云に賞せる其中にも不識院謙信は太極の軍配花を咲かせる伊達の弓矢又法性院信玄は無極の軍配は中に一物もなき大僧の拂子を無みれや花も實も何氣清大將と信玄を入無極の軍配を山本か見入道か在世の内は不半授頼りみ清而もありしを道鬼入道斯安や抒無極の軍配は渾（混カ本ニ）沌未分の有無を離れし境にて生もなく死もなく我守旗を無極とは動靜の二つ異なる所か心の軍配中く某命なる内君の軍配無極の位に

知らせ給はん様なし此所は詞を以て述られし某道
鬼入道か唯一身果るの後地水火風の四ツは元に去て
空に帰る所なれ君も空の一遁（トウ）術（コ）を一心の動静に
生死忘却し給はんには定ては太極の軍配自然と
大悟しまふへしとや上てを某流書に在を所信しる
よ今の様に所信しるは抑それ永禄四年九月十日謙
信の龍車の備に三年の工夫をなし太極の軍配自
己と発明の軍陣の法宇佐美駿河守か為倣の羽を付
や車菱に返しを定し龍の車掛りとは誰ならずし
ければ元来の内に引返し犀川も引添て八千の英卒
を備りに備ッてよ諸の勝負に武田方の当惑前代
未聞の体と云は兵事の時を云ふ古典厩は母衣を
着へ上ヶ給ひて諸身代りの前備諸角豊後初鹿
三枝討死の諸合山本道鬼か動功の勝負二時先に
をおまに持るは妻女山へ分ヶたる壱万弐千飯富
甘利馬場真田高坂芦田なとを廻せは御本陣危急
此二時を君恩守に忠死の一時山本勘介入道鬼一時
は典厩諸角か備まて此時究と軍配は悉く山本
道鬼か家傳の軍配にて越後の猪武者向掛りに
掛ると見れは巻返し引かと見せて一所に三十八段

の奇兵の大将謙信旗本を破りて既に武田の旗本へ
切て入られハ甲州勢悉く討劫散上杉方も戦疲れ
大将と大将の勝負究めかね此時と雖同しからぬ折節
に山本勘助討死と呼る声ハ信玄の御耳に入る
大の空饒に床几より持するをふらせ給ひしか居て汝
極の心仏得んとも敵なき事ハ死もなき大将當たる
法武者振り鎮弥山が崩れ掛り欲界の大六天魔を
雨と降らせ芸退ぬ床机ハ動静の静嶽く学る巌
そ時ハ土屋平八と此真田喜兵衛の床几の脇立
法床机を後へちろくと引く名らさの清追ハ汝云に
名らさを尋れハ太刀を腕の清白眼精（ハツト）志人にを
こ済ぬき危されさ清先遅と引く云動かぬ所へ
旗本同毛に桂包後ろに下て乱が附しる並居しる法
師武者の床机を謙信ハ難に武田信玄と目附か給
ひし太刀風に倒しハ清御元の山本太林帰る太刀の
切先キハ君信玄の軍配へ当り跡ハ二ヶ所の切込是を
世しの評判に謙信の太刀を信玄法しハ軍配と
謂と云傳ふ実るにし所々にて同じ書に記さゞぬせ
らしき場所極の軍配ハ寂よ生死の臥しる一言大将
の本望に動き給ハぬ大将當しるゝ真の仕の院

され是より其時青貝の柄持鑓にて放生月毛の後ろ謙信突んと思ひしが極威に恐れて突そこなふて馬の尻踏突かけて虚空に掛出し謙信落馬し給ふを越後勢走り来て三十人まで引包んで追ければ甲州勢も我の君を大切に存して一切自身の誉れを好に此床机を立退し依て大将軍の合戦なれ共武田方旗本を不返さん武田は後軍大将の左馬助迄討死山本道鬼を始として歴々の討死を招きて依て甲州方八分の負との沙汰之しかるに謙信より使来て三年以来存念の通

武田の旗本へ本望とする処法師武者見遣し六人有同勢を出し詰の勝負不付内其落馬して引入早廿糖過江か三日同事に届延之の趣を法性院殿床机不動武田の旗本の芝居に立しと語れば又此度も上杉家の吟味は越後方八分の負甲州は八分の損と分明然共勝負の儀は武田に有て上杉方にては習戦場の同様相臨は勝負并損益の沙汰吟味有て迎て其思召しよりの可謂なる弓矢の礼義古今無形甚大将ヱ一方の信玄法師去二日茶密に真田くと討取法孫元へ追出されは折節時は丑の下刻深く

ガラス使用

さる諸流より我四大名より家に帰せんい迄きに有
る其の内に一人の軍配て採察なし何とも勇を表
以して智仁の二つ備ハり海ハ信玄か臓腑を察し
三枝又海に続く安極の軍配十年に乱れまてへしと諸
人を新謀しか三枝甚か由ハ天正三年に長篠合戦
に討死し同十年に武田家傍人去の為に亡びしこ
そ初と並覚えし隙に偏る事信長公へ手強き事し
小栗徳川へも孫と無事も安極の軍配淫んの必定
當年と四十年海我か将として年来父か魂魄に精神
を入臓腑を採軍配傍授ハ此昌吉か得てし一ヶ時

たゞ依吾村始終黙しも居しけるか父に向ひ申す
ハ然るハ安極の軍配とやうも現の無配と云に至しく
はへし父上より信玄の請見のほどうし業ハ終や有か
何をか海北殿ハ盲人なれ共葛山殿甲府殿仁科及椿
雅の善房方至か信玄請道去の節より究竟の士大
将馬場高坂内藤山縣を始として有ぶるに皆父
よまハ者りしや又信玄の最負か係時有てハ侍道の
不吟味の軍配しるへし此所を兼知仕んとも是を求子
頭首なる安房なる昌幸覚ふとして初も吾村小笑
顔を見せらいハ此時之ともや能へ家の附授之為事形

有物に理の不備らと云事なし是体用の並ひ立所に
して千差万別相離るれは単道の安定も形を以て
得かたきの時は其理より入て察すへき所は其
形を以て動くへし只今海の石畳の下には信玄景虎を
神として理として浸りんて心覚へ僻は出来しなく此る品
共の法性院殿より清見立あらし単配は則京の所は
撰信玄禅道の軍旅と云は孫子の軍旅之要肥に
合を書たる四句の文

其疾（トキ）ヿ如レ風　其徐（シツカナル）ヿ如レ林
其侵（ヲカシ）掠（カスムル）ヿ如レ火　不レ動ヿ如レ山

是孫子の語之是は川中島に度々合戦海尾後清馬先
きへ立孫子の御旗元亀の頃より東海道を清上
洛との軍馬の催し笑八州は云に不及[illegible]頭の
歴々より清上洛の清信を中へ入るといへとも一宿所清
兼て只武田清家の分別より一分の清勝利に花々
回へ手を掛ける信長の尾張にては早く清を知
西に立し家康の敵は源家康をはた是三の二ケ国より
味方の分別を方々に越てる武田勢則は報ひ出
北条の弓矢と一揆一人化を立つ元亀元年極月
廿八日味方か原の合戦に信長より九条三万余のか

ガラス使用

勢ある徳川殿と家康の大将濱松を押して出織田の加勢は後陣の遊軍陣分遠盧の合戦ありしか信玄は唯見物のごとく其本陣は堅く設立先に七段に備へを設加茅倉丹後か小荷駄の様源只一戦に濱松へ退く織田の加勢の大将分平手監物を討れと其本宗の弓矢退年の其無説と有一本大将の其旗は天上天下唯我獨尊と書年中合戦の所目貫を富士の恵林院より高山和尚其律条の意其旗風に揺き志てめされしは貞純親王より源基王へ源氏の系図に在り故今龍の細合代々源家の将軍は

七の兵形ありしか中にも所目貫と成り信玄其代に至て昇り龍降り龍一對の諸目貫其子に入しは将軍職其家は我より外に譲りえんと志は高山筆を投し大将の旗と其秘蔵有りしか謂は日本時勢を得し廿ヶ国の信長二ヶ国の家康唯其一人みて濱松へしてき退加勢の織田勢追立し東海乃に燦然たる其號旗を設思合此旗を中備の先（下）真（上）へと有らし真田と三枝を其旗奉行とも護軍とし設行付押立しか其旗西へ靡きしを其は家に掛り西へ進むとや由を得しを其使有や旗の手の靡

方へ急ぎと致し次第を諸士に吟味有けるが此真田
は若年より前より後を見今日より明日を思ふ事に癖
なりければ右見合諸旅は大條の路東へ鹿等は西を赤
是諸出馬を送をれ旅さしを勧め末孫の末々までを
とやとへは諸吉事を表しは只に恐る亢龍の悔の彼
常に計らはれ此語は猶んとやよしる葉を捧
子を以諸士計成功名未備軍の肉儒に長もし故
前に登られよりは後にも志りなからまいつれと云
事を能く工夫仕り信玄が肉成より出生せさるはいか
ゝとぞこ葉を感もられ高坂弾正をして諸密談有り

被れねは一諸陣を計務諸越手は計成しか兎蓋より
信玄が軍配は若きより云真田弾正忠十ヶ年之キ
はりて生れ離るなる事へ頼母ぶと計らしを何を以てと
有る事の人は彼の云く示しゝて死すれは生し減すれは
増世界は有る所肉は人又成る事なしといへ云人と今日
を知りて明日を知るは役計軍道をは士卒は未得
も止む事へ将たる者の大に相違一と云ハ二有る事
を思ひ盛は衰るを観ミ勝ては負ると云事有と心
得道き時は志すれて後を勧めしかて先前を後に
先るの急退動静得失存亡悉く人中の軍配より

幸村も短氣ハ新ニ向ても云しかあし。長ケの搦一も便るべんを以て心を探る事を要とせよさ実ハ探ると云文字ハ作りハ一ッにして扁の相違斗氵（氷）を書ケハ深しと讀せ扌（手）を書ケハ探ると讀む是通用の文字を實理水中ニ手を入るゝにて是敵を探るも勝利を探るも萬物同じ道理となれば一言にて是か容易行ケハ家康も寝覚んか悪かりふと云しハ奇代の見事なり

于時左衛門佐幸村ハ只か無極の軍配の謙踐くとして所居しうしかん中よれ適し謙信猛勇無双の太極乃軍配も花實の相對二つなかりけれハ此幸村か一人のためとさも冷なる云力ハ自然と面ニ顯るゝを一静ニ押静めて以外ニ向ひ太極無極の論猶中ニ備ふる所ハ云論ニハ述へしとハいへとも軍配相承の血脈ハ家康成かならハ其往（イヘ）ス家内ハ子の威不ル付ハ世間の癖ハ其上の後ハ恐らく天下ニ恐きん敵ハ有てさとたもの佐あるを以てたゞ其の終より百戦の功とを極テ上に手を以て鳩尾を押たりの手を仰ケ右の手を俯ケてみ田すを下シ人究ニ拳を居へ其上太極無極の納る所ハ是なくと勝を以て指さうれるを安房守昌幸ハ碁盤ニ及ひ源居

ガラス使用

眠りさしかハツと驚き碁石の白黒たるのゝまゝ巻散
ありし事一天の星に似たり而して碁盤の上に久しか
信玄の形見となる様子軍配携へしヤア者共と上ぐ指
し天は氣を以て云故に無極地は形を以て云故有
ゑる事有りたる上下の指揮をゆるさず初き時に
地となる母の指南に依りて動静諸点の事を習ふは母を
地としや形を成すの故之八方よりは父の教を手にして至
道の軍道は分編六藝を初として八陣の法等とも
悉皆父の軍配之天の性を得たりして汝等如き至愚
の人推さらんや然る時は渾然したる此居者の處したる
碁盤はいかに坤結したる井目（セイモク）は地の九州よ目は三百
六拾目、一年の日数静謐したる黒白の石は一天の星
斗り爛さしより四震木は東三離火は南にして三角成
形二兌金は西にして動きて進で西国の武家よ此眞
田は六錢の水中に居くとして座はる事南面の君子
に似たり碁盤に等しく四方信濃の上田城を責る四
震の東国勢震雷の音百里を驚す太子の兵馬は東
国勢の備とは居所から初めしたる白黒の石本よ斗り
白黒混りたるは見ず西よりは黒白一面に木（スジ）を剝へ
流儀分明にして一石として大将の形なし富に擬せ

ガラス使用

昌幸東国勢を引留め嘲弄して懸軍に時日を移し上方一味の上からハ太子の敵の与吉味方の為にハ擲に立向ハん勢ハ又方もてふさく方を引返し算東勢を一方へまくり付て戦ハゝ大方の味方勝の利とらん謀しより入らさる究竟に出しけれハ過ル何らハ子を持て居る真田も二人の子なれハそれに思ひなるへし家康呼とも何とて一旗上方一味となる大志伴ふ去失の云分さへ有らハ其儀ハ家康ハ天運次第に一方ハ立とも絶請する胸の算盤違ふハ敵方より構ふる如く敵の因果に真田ハたのミ

終るとおもへハ又幸村よく寛大遠慮の軍配ハ囲碁の遊ひに志くハなしと碁石をいて白黒に分ける東西の勝負外の位を倩探りし幸村密かにしるし父昌幸か一言の下に太極の軍配を得うるとかや太極の軍配に致るハ又兵所存其の内ハ親子事古今の論万代不易より父有れハ父を楯とし師ハハ師を請の城とし皆人性の志執む所なれハ家に嫡孫有て跡を継く所なき時ハ一人坐定する所自然と太極の位に致る本なるへしか

真田伊豆守上田城に押寄ル事

ガラス使用

附右戦十一段の事

并信玄幸村相撲に及傍観事

然る処大手の物頭山田左衛門来て告けるは吾の軍立と敵陣深之斉計るには傍らを深碁先登の傍らは伊豆守の謀旅を立られ奥田の士卒同勢の若者押来て押付想構を赤備りは早い出定悉くの徒下知に伊豆守も見定ぬりて弓鉄炮を立止め陣を合て突止て中との後定めなれ共三千騎の勢にては玉条なくては敵對仕るへく始戦の弱にいて此上には徒下知を中来る折音佐久男の大聖寺とい

ふ碁好きの侫僧招ひなかりて城へ来りしを相手とし碁半ばの若高橋氏是称して居る処安房守かしも石添想構破れてし一ヶ所形れなる上田の城を謀か破らんと思て上手の敵か手を破し口より押のぼらんとせは石一ツの捨石を軍も碁も石積さは二里塞くへ只一ツ舟捨置とは所々の所へ塞て劫かかる心なかし劫と云事は相手やかんと謀て世応をなさんとまる時は後しをあとお手ゆりし東軍の敵の利ちとるをも西よりおねくあ却せは敵も後からは追座しつれる所は味方の使ひあく敵は大損に唯石軍の心ありて軍配我か石を石取敗北を

減らされ生たる石をハ生を全ふし他の石を取らん
とする事大概我の碁ハ四方の隅くニ味方の石目をん
眼ニ活れハ中花よりハ四表の地廣し中へハ繁きの縁
掛石一ト営を所くニ出張是勝利位なれ是ニ随ひ掛引
碁と云字も此石と書くニ何れや甚要なれ此ハ物騒る
きの果ハ生之惣構を破られその後の事ニ敵ニ一ヶ
所破られハ縮る事つゝ後悔仕しも未然ニ此義を固くハ
掛る敵も掛られ寄せ来るも退引も所縁を成さるれ
も所縁なく仕留んとの猛勇ニ何されしてハ大敵も
難防小勢の城ハ持らし伊達も何程の軍配を振ルと
てし此昌幸か眼前ニ来て何れ陣法の隊伍を立ねん
ゆ構ふる戦ならハ只石原石勝と石負せよと云所ニ
碁石を拾ひニなさんニ黒白生死の石軍を離くとし
と観察する安房守ハ此悪果なる然ニ大ニ馬出
しの喰違より城の惣構を只今伊達も遠押寄て
城方の足軽を追返しと云ども石垣ニ真田左衛門
佐幸村ハ此敵を見て一入軍学ニ意を用ひ家業究め
小助なる人と父の家の軍配論古戦場の地の利害を
談し明くれも宿直の後迄おもしもぬかれ居しうしか
惣構を敵押入とゆうもちんと云ふ陣中下知の

ガラス使用

間に掛りける大戦をなれるより早く勝へ引付立ぬれバ
金目ぬきたる廊下橋の半階を一ツ二ツ三ツ目ハ二の丸乃
たまりに付小具足斗すまし早立出る三百人急なる所ハ
兼ての定め馬印斗見れハ唐人笠の馬印を二の丸の
引橋へ振出せハ馬先へ諸る長みの鑓引さげしと六十本
馬下に続しより勇ミ悪ハ乗形より引立へ侍テハ左右作歩
戦くと鳴る声を作しより作訓し只れ六弓に見へ馬
のに駒勝利を取ふ勇ミの策吉村ちしと声を遊され
名ある女ある勇男太丸へ向ふをいまさに人間百ハ
物見ケしより六角八角の棒の中間廿人真田か流より
若き者ハ吉村下知して静まく息切れてハ物際の
難所伊豆ある女とも遠意ハなハ打き殺せと声無れ
去りながら声殺さすハ不及切捨首ハ捨置にと旨
もなく大丸へ声出れハ左右作勝ある大戦をれを地
震に立を折ある大戦を声に居六十本の長みの陣
一同にちらくと陣ハ斤勝負ハ左右三角ミれをも折
発しハ棒手の棍へし武者立之出迎へ伊豆ある先に乃
若武者五百人惣構を破りける勢ひすまし驚く声も
のりハ直ちに乗りくと押来りしか鉄砲のぬきの上田武者
六十本の折発陣の穂先へ引掛りてもさりくと立留る

ガラス使用

太鼓十一段之事

一 待押の太鼓

二 早め太鼓
陣押の時天氣惡敷道を早むるか又ハ敵合を急く事何とも相圖の拍子有

三 留太鼓
是ハ押道の惡敷時ハ先手より異敵来崩子を後道を告て知らする故先より跡へ傳ふる太鼓之拍子口傳

四 崩太鼓
敵方崩る時の太鼓附二の實の鼓を引掛る太鼓但し武田家拍同しき故甲乙を遂口傳

五 寄太鼓
是ハ敵陣又ハ城へ寄る時之

六 引太鼓
對陣の節合戰崩中城責の時引とれ太鼓なり揚貝なれ共軍の模様軍中の評定に依て貝を不用太鼓を用る事も有口傳

七 返太鼓
是ハ引太鼓を打て引とる節ニ味方ニ相圖仕

ガラス使用

敵の退散ふ場を見て追々太鼓打かけ繁ッめに打て是ハ入との太鼓之也虎者ども打破ハ士大将物頭自身に打太鼓之太鼓役人の打ツ太鼓にはあらぬ

八　折敷太鼓

迎ひ合ふ旗二のよ備合する時先に弓鉄炮打合て場の果さ時々又進ミ来しる敵を出合頭より先に来る百人まても一旦崩さるまての備よ小旗大旗を振れ旗を折敷旗備掛れハ何程備を打て来る敵方も志くけて立留る利有也

九　立太鼓

折敷太鼓の后立上る時の相図の太鼓之又敵兵を伏し中途を打んとする所敵合迫き時ハ立居太鼓久しく打ハ案外成る在香に居調ハ斗馬を引立馬の側に立居る之后敵来るを見て打つる場の立太鼓之

十　備太鼓

是ハ備立の太鼓之附　螺に添人数を立備る乃音取り

十一　ちくま川大戦又云定大戦

是ハ味方府討伐ニ出る旨先の首尾ニいよる
とて善悪共ニ川際まて及ぬ先ニ人を役立
ちくまり居ちくまりの大戦ニハ相詞と時の定め
しるまへし又乱軍の旨給へまつと引れ共届乃
息を継共糧をきふ旨も此方存ち大戦ハ几之
皆是ハ敵方の不可究りしぬと鎚ル旨万事の
大戦と日傳

取子去ル伊豆守先陣ニ至ミし是細ハ九次の和様
の大名陸分責へ入度功を可取と働くといへとも中く

上田城の丸早し枝群の威者立ちまし太守先の矢掛りと
も在之共ニ事成かたく剰へ城内の精兵ニ手負を討
出し事九ニ手の大名府中一手くを息抜ちりしより三
日の間ニ六百人ニ越しまり依之戸田左門牧野右馬允
ハ是非く和様大名中隙りし我く兼る先陣の九
手ハ評云甲斐真田ニ手強く防ル働ル旗本の
力ニ依て勝利を得しといへとも事済りし後九手
の大名立ちよし共責ニ九手押掛て上田城を抗と
し一人も不残討死せよと自憤激し責ル度乃
様子を伊豆守信幸ハ小男の本多忠政ちる

ガラス使用

を奏者として申上る趣は
先陣の兵中怒りを発し責寄ると相見へ候時旗本より
責口を責懸有之一手際よりの儀を兼而御沙汰し攻撃
しける陣代は先手の大名何れも至極の節目に寄を
一日の内までを惣責と有之まゝは落城て仕もふ知得る
其然らは討死生分に覚候は不残と相揉りは子細に
城中にては寄手の方よりは先んじ精兵大分籠り在統
中井本村兵流よる定用学石恵りとやは武人張りを引
にあいは諏訪左衛の鏑流（ヤフサメ）に前後に的を立従未の射
諸二時の間に余筋を通し其内九百三拾三筋跡

先を射る為稽の手本ます候是等に続きは弓精の
兵百人に試を分尋常の者に競りし兵四百余騎もち候
得は一日一夜に退落は其三方の上田掛りまで後日の
御用にあたる事諸相立申者浦起る時は仟人の内府
公請をなすやまれ多からぬまで勢を二手に分られ
しけるは天下分目の法を功成る合戦なと有ねは處
擬手の法は箭を遠に放ては法の手振の法中は内
外の倣と中内弓矢の上の評定は一郭より一回一里合
六十餘州に及事古今不承事に候者前後の例ろ
當能く法堂念を詠追了統は未付伊豆守信綱斗は

ガラス使用

離れ物離れハ近く味方ハ遠き節目とハ相知しる某仍而諸軍使番何を差り備よの一陣ニ至く此旨の趣秀忠公聊も心ニ存候所急度何分ニも沙汰を有之き御細ニ申上る處く黄門公指揮に程くの諸将定之候き老功の在中より若よニ到を一度ならに再三ニ伊豆守ニ申ヰ名誉を成させん事徳川家ニ人なきったしと愈致なしも秀忠公情く思しも斯屈為く安中ハ老功の氣もなかの而くも其兆弟ニ不斯路ハ子細ハ此度真田表の不首尾ハ秀忠大将と表ハ一段へ引返しる事之然者上田城を責落しあ

房るたまへ佐首を見しれとも味方の軍勢若干討されよ負斗と成る時ハ備よの軍議ハ此定よ此表の恥辱ハ秀忠一分の恥之関原口の戦ニ負るか破と何んニハ天下の恥と可云天下の恥ハ父内府公の諸張權なれハ子の秀忠ハ恥辱をかる云大よの父内府公の由ら矣よハ病ゆかて伊豆よるか中宗秀忠をを急ニ相應とり急き伊豆守先登ニ進んて軍中のを追返故ニ相討ハ秀忠か恥辱を雪んか為ニ吟味とも角も故方の味方損せさる様よと至極の由厚んとく云士卒を諸将々の仁の諸下知通し天下草創

の御家とうしもみれハ依之衆愚の攪（カク）としけるハ一貫の唯々まれ石如と謗まいふきく雀の小聲より鶴の一聲御一言の出るを笑ゝる處き伊豆守よりはしなし旨乃まく伊豆守先登よ発しかハ三万の士卒を助ケ大将軍も衆恐此如を無り強いしこと殊ニ上田城も我責よ能落難よ皆三万余も大将軍を始として小負死人集を乱し緒ての負ての者とて分要を黄門秀忠仁孝信の御志深かりしなれ伊豆守か願の趣能仰付と唐一ゟをんせん陳を割趣り飛かゝ九頭乃大名中へ伊豆守大音上ケてよハりけれハ営表の候伊豆守御を幕ク擁と成やふ矢を擁止つねて某儀諸侯を兼りハ吾能ゆるへしと一言をんせ前後三万の難に皆元来不好真田との軍なれハ是不残寛し此度の伊豆守か返ゝ諸卿毎度諸方候くしと賞讃しなかゝ候く扎に先を追ケれハ伊豆守も胴勢者に三千余人真丸に成とゑしハ畢んなしに虎口を強し謀之無の程ハなかしと云れ

去程に信幸か忠孝二つを左右として此度の軍ハ是飛く難に皆の思く軍に掛り励む時ハ落城もまへきにお房か左の先に父子の討死も斗かたし然るよ

櫓より三万餘人中々寄方よりは助かるまじ残り寄方
皆々崩れてんは必定なれば此度の戦ひ寄方に利運
なし是は伊豆守一存をんやハ寄手も多分上田の家人
存命味方の三万も必死房忠何も請安辨に請信せん
との深き仁なりし故上田の城構をば当兵退立く
一人も不残捨操被りし斗大手先を禁るといへ共
城下の町へ火を不掛もんとする故之依て三千人の伊豆
守が勢をば長蛇のごとく長々と立続けしも跡より
他州の大名を押へさせしとの依之然る処城内より
たちまち佐者村は手勢三百餘人を引具し大手の橋詰

と云出草本の長みの路を折返せ睨に詰る所に
立に流石兄よの伊豆守なれば勢とも志て弟を志りし立
留る
かゝる所に城方の穴山市兵衛立出て大殿は弟左衛
兄弟ならは後陣に小山田主月高橋の人々を先として東
両清は父子へ引分かしる故今は父子も何れは兄弟叔父甥
聟舅兄角根ゞなく武人なるは東へ走る人西へ走る人
随ひしに大殿親子と左衛兄弟斗は一向西をば見
返く傾く偏頗の根情何れも見ん惜しむ程両方
を必敵と見しるよしハイサ一隊と定まる事静いまゝ

ガラス使用

孫さるゝ者に伊豆守によする群しをもち出されて色々出
しれ手沢小刑部十文字の鎗構へ出同僚の味方東西へ
捌らしる内に我々兄弟に目を付る事叶ハしなる
味方出しなつかしき折からなれハ兵出しより鑓倉ハ兵の
運次第いさ見よと突出る鎗ハ市兵衛か胸板の無了へ
入ん〳〵と出る穂先を虎鎗を受て一寸とも引ず
間の物語何と手沢者達の兄弟者に属泰しへ
しろ伊豆守殿一以の忠義たく継ま我も猶を去年
以来より方様にとまりしけるらふしやと突出た鎗先
勝まと請止め手沢小刑部いつみもハテ東西へ別しれ

云縁ハ縁なり手ハ手筋當着ハ味進ん息も臨程待
顔を突やつと巻おくしや中段を突来る鎗を宍山
ハ穂先一卜も孫も孫やく是小刑部か受の娘か只孫
しても動きゝふなる顔付なり若イ者らハ組突て運
る暮らハ切れハしヤア為にしと穂先を走らせ入り
来る鎗を手沢ハそむけやなりに摺や書よらぬ
突しる所に突みの宍山か肩先きかれて突かゝるを
市兵衛腹を立まいしか結納の鎗先きか息より新に鎗
先鎗ハ結納後しハ嫌ふ詞そ当方よりも松代の孫
コリヤア突やつと突しる穂先に手沢か内股を突かゝり

閾を隔しる襖を小刀にてつき破り様で切放させ下
付の環際を志ケとれこくハヤイ定山坊の親の内殿実は
不届千万いさ者し迴んだし迚の事ふ子共の縁組
親仁共の組んで如ふと新熟中の主縁同士引退て
様宿しと歎し味方も皆々無理先祢をもとこの腐て
も討れても縁組ふ相違いなし誰人いう我々之たるを
語く右を踏こても双方の掛ケ声ハ實験らしき組
合なり
者子の方より大膳将長声を掛ケ城内の女房者ハ
居ぬ気くと訴ハて宝月女房是ま有と誰提ケて
出かゝる所ゟ大膳と詞合せつきやる大膳ハ卒と歩
寄て百姓共の様ふ軍陣登詞を持ふの嫌しいと
云顔付是女房此方の媒まて夫ハ定山の娘息
の縁組とハ何及んそ引かゝく大討死るれハ能し
一方死ぬハいやでも宗顔をさらしたさんとほくれる
縁とハ知れしる事我も合せしいか端が違ふうとハ東
西ほし事馬康様ヶ者と呵られ毎女房ハ大膳将長
が姉の子なれハ将長ふハ甥なる夜ハ是ま不及力
量なる女房なれハ夫ハ定山夫人の追合内へ縦さ
し延めつゝ振ミふつゝ分ケ双方へ引分ケしハ急ぶかく

ある組合を荒者の大将ハ敵味方の意味を察し
頭立たる者共云をハ双方越度のなくハ猶みれ扱して
奇特なれ
伊豆守信幸ハ備より軍使を立申ニ父ハ安房守昌幸
の事ハ下知をも一戦を試好ニハれ左衛門佐ハ血気なるが
獅子の勢を遮り留め何程の高名ぞ是非両国
方との一戦なれハ人数を揃ひ討手出逢合の勝負ハ
なく成持形の法軍配籠城とや謂つべき伊豆守
信幸三万餘の惣代ニ當城上田を暮ひとれ出回
在所本意の至り早々旨馬を返し幸村ハいらく馬
前ハ見掛ニ鳴云兄弟軍ハ仕ニし相手の構ニ至りたん
父上の事ハ軍配虚実寂滅と観察せり此段ハ何と云
送る一云の手内よあ方の理を詮ニ弟左衛門佐幸村
ニ義信勇を蒐してハ面へ手以上ハ幸村ハ逃なハ
仕なきしかく揉寄くと仍ニ本丸へ来ての此
なる中手造されハ安房守か咳（シハブキ）ニ中咳兄弟ハ目瞬りよ
枝葉り本木の存る幸村か兄事ニ不及ハいふニ揉寄四
方六分と仮ある真田の家名ハ繁昌く是ミの事ニ
但兄の智仁才の智出でてもまた西へ入日の月へ光りを譲
り三五夜中の月の見ぬもてるを物よ勇ハ持料のた衛門佐

なり華東勢の眼前にむかひしと遠く觀察の早き事我智斗と思ふハ僻め事兄弟が詰にすれ大極無極の軍配ハ何とられん何の相手有や呉孫の道に親仁が行ん僻りといへハ華東勢の若者が智恵なしの集りしや海とも山とも攻めよしと此返答を天晴れ走出者村に傳ふ者村完不しと申笑を親父への安堵の為太平極二つの軍配兄信若にハいさゝかんが此者村ハ清閑に掛ん只今それと唐人笠の馬下に付添言葉に為兼察るハ者に伊豆も逢へ中には某と兄上緒顔を攻し此場の蔭若て攻出早く浅出逝へとゆる声の内よりも信若ハ床机を立て出られしを小姓近習の面〳〵躍にかゝれ付廻らに清寄用清兄弟の清中に生死乃我乃勿論なしと引留しを伊豆るハタト睨でヤア汝ハ軍の仕様果敢〳〵しからぬ故父上未練に思召兄弟に諸の緒顔とハいへども含く笑すハ一物ありた理の事を不察某にまで叱れそと追きぬると振切て立出七月乃来逢くの見乗軍門になりてハ常の對面ちと省歎と兵の中合無相違ハ神妙〳〵真海の緒顔ハ士卒の働手に取さる兵方某何をもって戦ハ幸村策を残りするを烈の一言大将として勝戦の論ならんハ

此十年の事とぞいへハ諸家用ひず其ハ先年若年の稚ナ遊ひに次第宗楠由の組手の稽古相撲に志し事甚しと有りしを相さなどんに脩ひ合て見ぞれハ力も章村ハ七年某れ諸角力の場へ出て上手に達しての諸見物に二タ若居因に某負ても見ても上の諸父諸負の見物衣父上の諸しうらしと中せし一云諸番めに二年の勤家を蒙り伊豆なる遠江出方評判の越暮ても免されし後ハ後に角力の性も不残先年七九の年称の相撲ハ更に不審時かして何と窃日諸負の一端ハさ諸出と式代出信者作く然として未向出て見れより四十四年実に光

強ハ逆旅と云日月を過ごし落と着しも宜（ムヘナル）計様の時もなかりせハ相撲の位ハ付かすして左も仇義ハ某ハ父の名思ひ級に出に入れ坊児出るとハ云へ先方ハ浦山しかるへしと何と某か首を取れハ伊豆なる信を出て関東の猶子皆三方聡人の魁将之と眼に告る甲冑（カフトヨロイ）（カツチフ）方ケたまつた（ハツト）思ひ何か相離されて不足なし伊豆なる信者を討れしハ猶子皆ハ見遁しに通してよしイサ組んとなと行司ハ自分の真ンの乗幣手に日と同を急度見合たる心手に組合しより双方の家人共見求深き心をゑりし尺拳を握り遠慮をなし

こゝかしこへ力を付る掛声ハ物音しけく本丸へハ追々の注進を猶の速を撓くかこそし以安房守昌幸ハ鍾馗か咲顔し形ハ猛えと覚へて揉ミまくし迎手とハたゞくと蟠松龍ニ擬手掛り東ハ縮り西ハ縮りか試探しる此松ハ人ならハか風かなハか東西の枝勢なしと子云の心を観察し迎手の趣意を察し然ニ知ニ兄弟ハ兄志ち迎合しか兄の力労しかん有ての事なるか斥候折やうつむく所を幸村ハ伊豆守か甲をちきつて大音上ケ伊豆守信幸をハ左衛門佐幸村か首取らしと名乗なから馬下ニおれ付と汗を

拭ひ立しるを城中もさよめき勢ハ東手の方より猶以大騒きヤレ真田伊豆守ハ左衛門佐ニ討れしと罵る事夥し此事本丸へ聞へしかハ蟠龍松の安房も南無三宝討れしか虚か実か何にもしと閑洞ハ（二本の手て）待の声を幸村ハ聞るや否や安房も葉羽織をすて投捨玉草の二頭室ニ渓騒を引迎へ信玄風の徊胴腰を羽織ニし桂包ハ綴をまぬい乗れねニし黙蔵の跡我掛られより早く是ハくといふ間ニ石突ニ長柄ハ太刀をへ去て出地露をまとひや仁王立ニ向ふを睨ミ斥候ニ軍配斥候ニ小記

ガラス使用

寔に宇の世の信玄とも又謙信とも是へに免此所
若手の華東勢大に強く候ハ城中よりハ安房守悪
手本を出して上田勢旨もくと躍入て投掛く若
手戦を乳擣するうちしかりおもハ物の見苦敷し
ふる城兵の紛れ隠く出る事油雲の山よりきさ引りか
すし若手の方にハあくと真田が出しハ安房守が手
諸の甥頼も伊豆守が討しよいハさまのみそししと各
後軍の家を見ると等しく大手橋のとへ床几を
立させ詠め居しうし安房守の采幣をとると廣土と
上りる凱哥と一同に左右へ佐馬下唐人豈に志で付
しをた兵を折し押出して真先に進めハ望月守悪
二の丸より押太鼓を打て押續く此仕立武者酬り
何方の若手も百戦前より眉々んしとまを寒し
討本陣を追ちて惣軍論退を前る高て人清との
評定ハ城方と手遠ひしる若手の方箸真田が武
勇に高感ちしハ必定なり

日本一統志巻第百終

特 3
1

鳥泉村
藏書之記
津田氏

ガラス使用